夕焼け通信
2020.3.16 1253号

編集 宮森健次

〒699-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

手作りのくらし２　46

木幡智恵美

ベスト（3）

端切れベストの背中に描かれた堕天使を見破られ、気落ちしたものの、ちょっと出かけるときにコートの下に着ると、暖かかった。コートを脱いでも、椅子に座っていれば、背中の模様など気づかれはしない。

一着作ると、創作意欲がまた首をもたげてきた。今度は編み物にしよう。

たまにふらりと入るオフショップで見つけて買っておいた毛糸があった。四玉入ったグレーの毛糸が税込み二百十六円だったのだ。百均の半額だ、買わずにいられようかと、即購入した。その頃はまだ、何かを作ろうという気持ちが沸いていなかったので、袋に入ったまま放っていた。二度目にふらりと入ったときには、八玉入り四百三十二円の黒っぽい毛糸を見つけ、それも買っていたが、やはり袋の中に眠ったままだった。そのどちらかを使って編み物に取り掛かろうと思ったのだ。

以前購入していたかぎ針編みの雑誌を取り出す。特に何か作りたいわけではなく、いろいろな編み方に挑戦してみようと、まず黒っぽい方の毛糸の玉を出してみた。編み始めたら、この毛糸、太さが一定でない。それにふさわしいものを編めばいいのだが、練習用には向かない。編みかけた毛糸を解いて、球にした。もう一方のグレーの毛糸を出してみる。見ると、アルパカの毛と羊の毛の混紡だ。アルパカの毛が暖かいのかどうかは知らないが、アルパカというだけで、心がほっこりとしてきた。これで編んでみよう。雑誌にはいろいろな編み方のベストやセーターがあり、迷ってしまう。四玉でできるとしたらベストだ。その中から、気に入ったのを見つけた。前後四枚ずつのモチーフを作り、それを縫い合わせるものだ。

早速モチーフ作りにかかる。鎖編みで小さな円を作り、一段ずつ網目記号を確かめながら編んでいく。何とか一枚のモチーフができた。えっ、一玉使ってしまっている。これでは前身ごろしかできないじゃないか。

がらがら橋日記

宮森健次

一人旅(4)

「ふとんさ、敷いてやれ。」

お爺さんがお婆さんに言う。

「いや、寝袋持っていますから。大丈夫です。」

まだ、人の好意に甘えることに慣れていない十八歳だ。軒先貸してもらって雨さえしのげればいい、と言ったのは嘘じゃない、食事もふとんもなんて決して思っていない、との表明なのだが、お婆さんは、聞き流してさっさと敷き始めた。夏の盛りなのに、大ぶとんだ。

昼間からストーブを焚くようなところだぞ、寝袋で足りるわけないだろう、とお爺さんは言いたいのだろうが、何も言わない。

オロフレ峠を一日上って、元に戻る。旅程は一コマも進んでいない。全くの徒労である。でも、掛けぶとんの重さがうれしい。思い通りに行かないときは変更すればいい、そこにはもう一つ別の物語が用意されるのであって、そっちがずっとおもしろいことだってあるのだ。そんなことを考えているうちにあっと言う間に眠りに落ちた。

寝起きはとても爽やかだった。朝ご飯もいただく。散々世話になった。礼を言って、支度をする。砂利を敷いた玄関先に出ると、雨がやんでいた。合羽を着ないですむというだけで気持ちが弾む。朝靄が草むらを覆っていた。

エンジンは一発でかかったが、もう少しいたわってやろうと思った。もうしばらく下りが続くので、そこで休めて、あまり欲張らないようにしよう。

お爺さん、お婆さんが見送りに出てくれた。相変わらずぼそっと何か言って相づちをうつぐらいだが、二人とも微笑んでいる。二人の視線を背中に感じながら峠の続きを下った。

さて、登別まで来て、ふと気づく。お爺さんお婆さんの名前を聞かなかった。住所も分からない。オロフレ峠の途中の家というだけだ。

あれから四十年以上経った。お爺さんもお婆さんもとっくに鬼籍に入られたにちがいない。心の中では、何度も二人を慕ったけれども、何も返せぬままである。

オロフレ峠は、北海道有数の難所と言われていたことをずっと後になって知った。その後トンネルができてずっと便利になっている。

あのお爺さん、お婆さんは、その便利さを享受することができただろうか。そんなことどうでもいいというように薪をくべているような気もするが。

もう一度オロフレ峠を訪ねてみようか、そう思うだけでわくわくする。理不尽な人生への対抗手段だ。

30代フリーター　やあ、ジイさん。安倍政権は緊急事態条項のある新型インフルエンザ等対策特別措置法の対象に新型コロナウイルスを加える法改正を進める際、立憲、国民などの野党の協力を取りつけた。これまで社会の分断を背景に野党を攻撃することで政権浮揚をはかってきたのに、一転して敵を抱き込む戦術に出たように見える。

年金生活者　感染拡大は野党のせいにできない。「サクラよりコロナだ」などといくら野党をなじっても、責任を問われるのは安倍政権だ。

3・11原発事故のときも、もっぱら責任を問われたのは民主党政権だった。事故の原因とされる津波対策の欠陥は自民党政権時代から放置されていたものだったが、国民の批判の矛先は政権に向かい、やがて民主党を下野させた。

安倍政権は今それに似た困難に直面している。それならいっそ与野党の翼賛体制を築き、そのトップとして国難に立ち向かう姿を国民に見せれば、内閣支持率の低下を止められるかもしれない。彼らがそう考えたとしても不思議ではない。

30代　政権が中国と韓国に対して周回遅れで入国制限をやり出したのは、コアな支持層である右派勢力に気をつかった結果とも言われている。

年金　安倍政権が歴代最長政権となった背景に、中国、韓国、北朝鮮の3国に対する国民の警戒感の増大がある。それが安倍晋三のイデオロギーと共振した。今回の措置もその流れの中にある。

尖閣諸島周辺に頻繁に公船を接近させる中国、慰安婦や徴用工への賠償要求を強める韓国、拉致被害者を帰さないまま核・ミサイルの開発を続ける北朝鮮。近隣3国の、とりわけ今世紀に入ってからの挙動は日本人の警戒心を刺激し、ナショナリズムの濃度を上げた。

国民はこれら3国を牽制する意志と能力をナショナリストの安倍晋三に期待した。ただし、国民は戦争も辞さないような排外主義的な政策を求めたわけではない。憲法9条の改正に賛成より反対が多い世論調査結果を見ればそれは明瞭だ。

それでも安倍に期待したのは、平均より濃いめのナショナリズムの持ち主のほうが3国を牽制する力を発揮できると踏んだからだ。濃いナショナリズムは論理的には戦争を排除しないが、そのほうが結果的にほどよい抑止力になるという計算を無意識のうちにしていたと考えられる。

それは自衛隊の存在を認めながら、非武装をうたう憲法9条の改正を認めないのと似ている。自衛隊の行動に縛りをかけるなら、きつめにしておいたほうが適度な結果を得られると国民の多くは考えている。現実と必ずしも一致しないイデオロギーの力、理想の力を国民はよく承知しているように見える。

30代　安倍政権は法を曲げて東京高検検事長の定年延長を強行し、味方のはずの産経新聞からも「わざわざ不信を

招く事態を政府自ら演じている」（2月24日「主張」）と批判された。

年金　この政権の最大の功績をあげるとしたら、民主党政権から引き継いだ官僚主導から政治主導への転換だろう。それが成功し過ぎて？政権は自らの功績につまずいた。

安倍晋三らは官僚のアキレス腱をつかんだような気になったのだろう。それによる傲りは「官邸の専横や脱法的な行いが答弁の破綻を招き、責任を押しつけられた官僚は、虚偽の説明や文書の隠匿、果ては改ざんにまで手を染める」（2月26日朝日新聞社説）ところまで行き着いた。

政治主導は国家から分散した権力を手にした国民からの委任があって初めて成り立つ。内閣支持率の底堅さに目を奪われた安倍政権は、そのメカニズムを軽視した。

30代　そんな政権に新型コロナウイルスは大きな逆風となっている。

年金　支持率が下がったときの安倍政権の切り札は「経済最優先」だった。それが今度ばかりは空振りに終わる可能性が高い。

新型コロナウイルスが引き起こした世界的な株安はリーマンショック級の危機の到来を予感させる。池田信夫は「経済的パンデミックになるおそれが強い」として「日銀が国民の銀行口座に直接入金すること」を主張している（3月9日アゴラ）。究極のバラマキによる消費刺激策だ。日本はマイナス金利なので、それを実行してもインフレになる可能性は低いと池田は見る。

だが、ウイルスに対する不安の広がりは国民の消費意欲を削いでいる。池田が一例にあげている国民ひとりあたり10万円を配ったとしても、消費が回復する見込みは薄い。現在の消費はモノの消費だけでなくイベントや観光などコトの消費が大きな割合を占める。政府がそれらの自粛を呼びかけているときに、国民の財布のひもがゆるむとは思えない。

だから、安倍政権が池田の言うような大胆なバラマキ政策をとることはないだろう。つぎはぎの対策はやらざるを得ないが、経済の悪化を止めるのは難しい。

ただし、それで内閣支持率が大幅に低下する可能性は低い。いま政権の首をすげ替えることに手間ひまかければ、状況はもっと悪くなると国民は判断しているはずだからだ。新型コロナウイルスは政権にとって逆風になると同時に、延命の順風にもなるという状態がこれから続きそうに思える。

ニュース日記　731

中村　礼治

安倍政権への逆風と順風